**ギャスケルのユーモア**

**―その萌芽と特質―**

**〇〇 〇〇**

**１　陰鬱なトーン――社会小説から心理小説へ**

『メアリ・バートン』（*Mary Barton*, 1848）に関しては、ギャスケルがジョン・バートンをはじめとする労働者たちとその劣悪な生活環境について細部描写した作品前半を社会小説と呼ぶことに異論はないはずだが、殺人犯の父とその濡れ衣を着せられたジェム・ウィルソンのためにメアリが必死に活動する作品後半は、家庭小説、恋愛小説、教養小説、その他、視点によっては様々なジャンルに入れることができる。しかし、この小説の語り手は、低俗なサリー・レッドビター、女たらしのハリー・カーソン、厳しい工場主カーソン氏までも含めた多くの登場人物の意識に介入し、その心理を描写していることを見落としてはならない。語り手の介入がプロットの進行に従って徐々に目立つようになる点に注目するならば、作品後半を心理小説と呼ぶことも可能である。心理小説はギャスケル、ジョージ・エリオット、メレディスが代表格だと文学史的には言われているが、実際に『メアリ・バートン』については、淪落した女エスタからメアリの恋人の話を聞かされたジェムの心理がオースティン風の自由間接話法で描出される場面（194-97）をはじめ、1 平坦な心理描写は枚挙にいとまがない。

しかし、この作品が社会小説であるにせよ心理小説であるにせよ、全体を支配するのは紛れもなく陰鬱なトーンである。その証拠に“gloom”という単語は作品の至る所に見出せるし、作品のアンチテーゼである“despair”とその派生語の使用頻度は、ギャスケルの作品中で群を抜いている。作品の陰鬱さを募らせているのは、この小説でやたらと多い人間の死への言及である。合計23人の死――大半は貧困と熱病が原因の死――に加え、阿片、飲酒、硫酸投げ、暴力、売春、自殺、失明、老衰、不景気などによって強調される労働者とその家族の苦しみが、胸の張り裂けるようなペーソス――“pathos”（Gk = suffering［*paskhō* to suffer］）は語源的にギリシャ語で「苦しみ」の意味――を読者に伝えてやまない。

**２　――ジョブ・リーとウィルソン夫人**

作品冒頭から立て続けに描かれる陰鬱な場面にもかかわらず、・・・一方、喜劇的息抜きの構造を照射するものとしては、不安に押し潰されそうなメアリがジェムのアリバイ証明のためにウィルを探して、リヴァプールのジョーンズ夫人を訪ねる場面がある。

 But sooner or later she must know the truth; so, taking courage, she knocked at the door of a house. “Is this Mrs Jones’s?” she inquired. “Next door but one,” was the curt answer. And even this extra minute was a reprieve. (335)

この場面に喜劇的要素はまったくないが、最後の“reprieve”という言葉は陰鬱な気分が絶望に変わることへの恐怖からメアリを、そして読者を「一時的に救う」喜劇的息抜きの構造をいみじくも示している。

＊　＊　＊　＊　＊

作者の語りや登場人物の意識への介入は、ギャスケルの作家活動が進むに従って少なくなり、アーサー・ポラードが指摘するように、『北と南』（*North and South*, 1854-55）では作者の細部描写が減って語り手の存在をあまり意識せずに済むようになる。 ギャスケルのユーモアの進化は、作者と語り手の存在を強く意識せざるを得ない『メアリ･バートン』の地の文における作者の語りによるユーモアから、登場人物の会話によるユーモアへの進化と言い換えることができる。ユーモアを生む典型の喜劇的息抜きは、そもそも俳優の言葉と体の動きで表現する演劇上の工夫であり、その効果を高めるには登場人物の会話に頼るしかないのではあるまいか。

ギャスケルのユーモアと言えば『クランフォード』（*Cranford*, 1851-53）が第一に思い浮かぶが、この作品は語り手メアリ・スミスの解説によるユーモアが主となっている。破産したミス・マティーが農夫の無価値な5ポンド紙幣を金貨と交換してやる場面では、彼女の破産によるペーソスを軽減すべく、ギャスケルは入れ歯を忘れた不備を隠すためにヴェールをかぶっているミス・ポールを登場させ、その喜劇性をミス・メアリの語りだけで表現している（125）。中年女が欠点を衣服で隠そうとするユーモアは、5年後の『ラドロウ卿の奥様』（*My Lady Ludlow*, 1858）ではラドロウ令夫人の旧友で饒舌な喜劇的人物ミス・ガリンドが晴れ着のシミを隠すためにエプロンを使う場面、そして父とかつて散歩した時に父の右手をつかんでシミを隠した場面（127-28）に見られるが、そこでは語り手マーガレット・ドーソンの説明と登場人物ミス・ガリンドの会話の半々で表現されている。

しかし、ギャスケル最後の作品『妻たちと娘たち』（*Wives and Daughters*, 1864-66）では、ミス・ガリンドと全く同じユーモアが、ゴシップ好きのグッディナフ夫人の会話（438）だけで読者に伝えられる。そこでは喜劇的状況を説明する語り手は存在しない。これは些細な事柄である衣服に拘泥した一例にすぎないが、登場人物の会話を扱うギャスケルの技術の進化と共に、彼女のユーモアもまた進化しているように思えてならない。ギャスケルの小説の中で『妻たちと娘たち』が、BBCのテレビドラマ化として最初に選ばれた理由は、そうした所にあるのかも知れない。

**注**

本稿は第15回日本ギャスケル協会全国大会（2003年10月5日、於実践女子大学）におけるシンポジウム「*Sylvia’s Lovers*にみる女性・小説・歴史」での発表に基づいている。

 1　テクストの構成時期の反映については、Shirley Fosterが社会的制約と個人の自由の観点から指摘し、また、Deidre d’Albertisは女性参政権運動と関連づけ、本作品を“a novel of petition”と位置づけている。

 2　第10章においてフィリップはロブソン氏とキンレイドの会話に入れず、聞く側にまわる（110）。「男らしさ」を誇示する言説をフィリップは共有していない。

 3　ギャスケルは作家として経済的に自立していたが、彼女の原稿料は夫の懐へ（*Letters* 113）、また、新しい家の購入手続きにあたっては、法律上購入者にはなれず、娘婿や娘の婚約者の力添えを必要とした（*Letters* 770）。

**引用文献**

d’Albertis, Deirdre. *Dissembling Fictions: Elizabeth Gaskell and the Victorian Social Text*. Macmillan, 1997.

Foster, Shirley. *Elizabeth Gaskell*. Palgrave, 2002.

Gaskell, Elizabeth. *Sylvia’s Lovers*. 1863. Edited by Francis O’Gorman, Oxford UP, 2013.

\_\_\_. *The Letters of Mrs Gaskell*. Edited by John A. V. Chapple and Arthur Pollard, Manchester UP, 1997.

Goldie, Sue M., editor. *Florence Nightingale: Letters from the Crimea*. Mandolin, 1997.

Helsinger, Elizabeth K., et al. *Social Issues*. *The Woman Question: Society and Literature in Britain and America 1837-1883*, vol. 2, U of Chicago P, 1983. 3 vols.

Hibbert, Christopher, editor. *Queen Victoria in Her Letters and Journals*, John Murray, 1984.

[Kemble, John]. “Custody of Infants Bill.” *British and Foreign Review*, vol. 7, 1838, pp. 269-411.

Langland, Elizabeth. “Nation and Nationality: Queen Victoria in the Developing Narrative of Englishness.” *Remaking Queen Victoria*, edited by Margaret Homans and Adrienne Munich, Cambridge UP, 1997.

Palmer, Alan. *The Banner of Battle: The Story of the Crimean War*, Weidenfeld and Nicolson, 1987.

Shanley, Mary Lyndon. *Feminism, Marriage, and the Law in Victorian England, 1850-1895*, Princeton UP, 1989.

Small, Hugh. *Florence Nightingale: Avenging Angel*. Constable, 1998.

（〇〇大学教授）

＊　準拠するスタイルシートはMLA の最新版。

Last updated: October 1, 2022.

Abstract

**Gaskell’s Humor: Its Germ and Characteristics**

 **〇〇 〇〇**

This paper examines …